

第5回「大井川知事と語ろう！新しい茨城づくり」議事録（意見交換のみ）

○コーディネーター（大輪氏）

それでは、ここから進行をアントラーズホームタウンDMO大輪の方で務めさせていただきます。

はじめに、意見交換会でございますが、60分という限られた時間の中で生産性高く進めていくという上で、3つのテーマを選定させていただきました。

これは、事前に県庁の観光物産課を中心に県庁の方々とディスカッションした上で選定させていただいています。県の観光の方向性とDMOの事業の親和性を考えた上で、DMOとして鹿行5市をまたいだ形で議論を行いたいというところ、選定させていただきました。一つは体験型観光で、先ほど岡本の事業発表にあったスポーツツーリズムも入ります、マラソンだったり釣りだったりそういった体験型観光をテーマとして入れさせていただいています。

2つ目は、農業をテーマとした交流拡大です。この地域、特に鉾田市、行方市は全国の中でも有数の農業生産地域でございますので、そういった特性もうまく交流人口の拡大につなげられないかという考えです。また、県としても全国でトップクラスの農業生産を誇る県でありますので、そういうところでうまくシナジーを持たせるような取り組みができないかというディスカッションができればと考えております。

3つ目に、今、スポーツ合宿を中心に我々は動いておりますが、今後さらにインバウンドのプロモーションを強めていきたいと思っておりますので、インバウンドプロモーションをテーマとしております。成田空港の近くとかそういった一次交通の便利さがこの地域の強みでございますので、インバウンド獲得に向けた海外へのプロモーションをディスカッションできればいいなと思っております。

まず始めに、体験型観光の推進に議論を移らせていただきます。

先ほど、岡本から事業報告というところで報告がありましたが、昨年立ち上がりまして、サッカーのインバウンド合宿という意味では、アントラーズさんのブランドと、この地域、鹿嶋市、神栖市はもともと合宿地域として全国有数で、そういった地域資源を活用してうまく事業推進ができていると思っております。

さらに、今後は、ゴルフとか、さまざまなアクティビティで体験型観光を拡充しながら、地域の交流人口を増やしていきたいと考えている中で、今回せっかく知事がいらっしゃっている場ですので、様々なディスカッションをして、アイデアの種を探していければと思っております。

まず、さわりのところで、岡本さんから、今こういうことをやりたいとか、個人のアイデアベースでいいので、いろいろと議論のたたきとして出していただければと思います。

○岡本氏

体験型観光では我々の地域にはどんな資源があるかというところで、DMOの準備委員会から数年間悩み抜いた種ではあるのです。

いきなりハードをつくるというのは、お金のこともあり、非常に難しい。であれば今ある資源って何というところかというと、我々がこの中で議論しています。大事なものは、一つ、期

待感を抱かせることかなど。先ほど述べましたウルトラマラソンもそこから派生しています。鹿行5市をぐるりと回ることができて、連携ができますというようなことでいけば、五市にとってこのマラソンは非常に有意義だったと感じていますし、だから2回目をやろうという流れになっています。

このことが、先ほど知事のお言葉にもありました霞ヶ浦りんりんロードでも、土浦を中心として、つくば、または霞ヶ浦エリア、また我々の行方エリアまでりんりんロードも来ている現状を考えると、北浦も霞ヶ浦の一部であるというとらえ方もできるわけだし、北浦においてもりんりんロード的な自転車の観光も考えられます。北浦沿いの道でもマラソンコースとして活用できているわけだし自転車もありですよということと言えますし、活動としては、今後、注目していかなければならないところです。

北浦を活用すれば、鹿行5市連携というところで、サイクリングを延伸させるというようなことは、我々の中では、今後、これに少し力を強めていきたい。また、大輪の台詞にもありましたとおり、茨城県はゴルフ場が非常に多いです。さらには、千葉県を含めて、栃木県も含めると、全国で言うとう上位5本の指に入るような関東3県はゴルフ場が非常に多いというお話もあるので、隣県の千葉県も含めて、成田空港を中心としたゴルフインバウンド的な部分、これは県のほうでも既に国際観光課でも力を入れている部分ではあると思いますが、茨城全体の面で見たとときに非常に多いので、これを一つ、県の売りとして協議をし、鹿行地域もそこまでゴルフ場が多いわけではないですが、県と共に何か一つ形にできないかというのが我々の考えです。

また北浦の話に一旦戻ると、やはり釣りというアクティビティもあります。この地域の釣りでは海もありますが、北浦に関しては非常にブラックバスの釣り人が多いということがあるので、そこを少しヒントにしながら、それも着地型の観光の一つに考えています。

○大輪氏

今、岡本事務局長から北浦を活用した釣り、マラソン、サイクリング、ゴルフというキーワードとなる発言がありました。

我々の団体の中で、ザ・ロイヤルゴルフクラブさんがゴルフ場として入っていただいているので、インバウンドのゴルフというところで、何かお考えや、今後、DMOと連携しながらこういうことをしていきたいみたいなアイデアがあれば、河田さんの個人ベースでもいいのでご発言いただけたらと思います。

○河田氏

ザ・ロイヤルゴルフクラブはアントラーズさんとともに世界を目指しているゴルフ場ですので、海外からのお客様はお断りができないと思うのですが、現状、各国のマナーなど、そういうことがあって、なかなか平均してゴルフ場の受け入れができるかどうかという点ではまだクエスチョンな状況はあります。なので、ゴルフ場に世界から来ると、1カ所だけでは終われないと思う。その辺のコーディネーターも含めて国際観光課さんとも話をさせてもらっていますが、あわせて、成田空港からの二次交通であるとか、茨城空港からの二次交通、この辺も結構悩みが多いところでもあります。

あわせて、ホテル、鹿行地区は特に少ないので、その辺の受け入れ状態ということが今、悩みではあります。

ただし、今後、受け入れを我々が先頭に立ってやっていきたいなとは思っております。

先ほど岡本さんからありましたが、今後、協議をしていければなと思っています。

○大輪氏

まさにザ・ロイヤルゴルフクラブさんとは今年の3月に、DMOとして原資をもって、声をかけられる中国、台湾の旅行会社4社において、現地のゴルフオペレーターの声聞いてみようというところでファミトリップという形で呼んでみました。

我々がインバウンドゴルフの二次情報として聞いていたのは、ゴルフをするのだったら、例えば、向こうの人はマレーシアのクアラルンプールだったり、ハワイだったり、タイだったり、そういったところに行くので、あまり日本にゴルフには来ないみたいな話でした。実際に呼んでみると、ロイヤルゴルフクラブさんのファシリティが高いというのもあるのですが、かなり満足度が高かったです。すでに先行して、神戸とか東京のほうで、独自に地域のゴルフオペレーターさんが中国や台湾の方々の取り組みをいろいろされていて、日本も今、インバウンドの観光客がすごく増えているので、そういった中でニーズはあるという話は参加した旅行会社からいただいています。

一方で、いろいろ話を聞いたり、調べたりしていると、日本の場合、大手の旅行会社が、海外へ送るのは強いけれども、海外から呼ぶのが弱く現地のゴルフオペレーターとか旅行の会社と連携しきれていないというところがあるのかなと思ったりしていて、初めの岡本の報告にもありましたが、我々は広州に今アントラーズホームタウンDMOの拠点をつくって現地の旅行会社とやっている中で、その旅行会社の社長さんがすごくゴルフが好きで広州だけではなくて、上海付近のゴルフ好きの旅行会社の社長たちとつながっているみたいな話があったりするのです。そういったところで、もう少し面白い取り組みをつくっていけるのではないかなと思ったりします。

高木さんも一緒にファミトリップというのに参加されたと思うのですが、実際に一緒に参加してみてもうですか。

○高木氏

私もゴルフのファミトリップに同行させていただいて、実際にゴルフのプレーをされる方、プラスアルファでこの地域の観光をされる方というパターンに分かれる部分はあると思います。ゴルフをされない、例えばお子さんとか奥様と一緒に日本旅行に来たというところで、例えば、旦那さんはゴルフを楽しんで、奥様、お子さんはこの地域の観光を、なめがたファーマーズヴィレッジさんとか、鹿島神宮とか、時期であれば潮来のあやめまつりとか楽しんでもらう。ロイヤルゴルフクラブさんみたいな格式の高いトップのゴルフ場もちろんそうですし、ほかにもこの地域にゴルフ場もありますので、それ以外の幅広い層をターゲットにすることができるのではないかなと思います。

○大輪氏

磯山さん、行方市がこの地域の中で一番ゴルフ場が多いと思うのですが、市の中で、観光というとなかなか着手しきれていない部分があると思うのですが、海外のゴルフのお客さんと呼ぶ点で、行政視点で何かお話があったりしますでしょうか。

○磯山氏

行方市はゴルフ場が多いのですが、日帰りの方が多いですね。行方市内の宿泊施設が少ないもので、それが一番問題になっているのですが、来て、泊まってというのが一番理想的なのですが、そこまではちょっとっていないのが現状となっています。

○大輪氏

茨城、千葉はゴルフ場の数も全国で2、3位ぐらいに多いところではあると思いますし、今後、インバウンドゴルフを地域として盛り上げていくというふうになると、鹿行地域だけということではなくて、県とか、それこそチバラキで一緒にというところも世界に対してはあるのかなとは思ったりしています。今後に向けてというところで、知事もゴルフをやられるという噂は聞いてはいるのですが、知事としてお考えがあればお聞かせいただきたいと考えています。

○大井川知事

ゴルフに限らず、体験型なのですが、やるならほかと違ったことをやりたいなと思っているのです。ほかをやっていることではない、差別化できるようなものが欲しいなと思っていて、ゴルフツアーも呼んではいらるし、韓国の方はゴルフ好きな人が非常に多いので、喜んでいただけるのですが、ゴルフ場がいっぱいありますよというだけではなくて、もっとサプライズが欲しいなと思って、どこか拠点のところに泊まりながら、提携しているゴルフ場を自由に回れるみたいな、好きにその日に選んで、その枠があって、そこにその日のうちにいろいろなところを選んで行けるみたいな、そういうゴルフ場同士の提携と、そういう枠をつくってもらいたいなことができないかとか、それによってたくさんのゴルフ場が楽しめますというようなことが可能になるのではないかなとか。

あるいは、100キロマラソンのルートを単純にサイクリングするというのも一つの手だと思うのですが、どうせなら、霞ヶ浦のサイクリングロードとくっつけて、100キロプラスサイクリングと、スイミングと、本当にアイアンマンを超えるような鉄人レースをやるとか、そういうひねったやつで勝負したほうがいいのかなどという感じがしますね。やっぱり話題にならないとどうしようもないと思うので、そういう玉として差別化できるものができれば海外に対する発信もすごく楽になると思うのです。

ちょっと気にしているのは、東京から地の利がいいから、それなりに客は呼べると思いますが、100キロマラソンはほかでも結構やっているとか、単純にゴルフというと、千葉とか栃木とか幾らでもゴルフ場があるので、アントラーズホームタウンDMOがやっている企画は何が違うのだというところを何か工夫できるかいいかなと、お伺いしていて思いました。

そういうことで、海外に発信するときは、ぜひ我々としても商材のネタとしてどんどん発信させていただきたいと思うのですが、そもそもの商材自身を、少しコンセプトをほかと差

別化できるようなものがつくれると楽しいかなと思います。

○吉田氏

その差別化の問題と、宿泊客が少ないというのは、もちろんホテルが少ないということもあるのですが、東京近辺からだったら近過ぎるということです。だから、もっと遠いところをターゲットにすれば泊まりを含めたものになるのです。それでインバウンドということになりますが、アントラーズも、成田空港に第三ターミナルができて、LCCがたくさん各地から飛ぶようになってから、LCCを使ってアントラーズの試合に九州や四国から来るお客さんが非常に増えました。それも見込んで、成田空港からカシマスタジアムまでの直通の往復バスを出しまして、その利用者も、今週末の20日の試合の相手は佐賀県の鳥栖ですが、もうバスは満席ぐらいになるくらいです。そういった遠くをもっと見ていって、もちろん遠くから呼ぶには、他の地域と差別化した、いいものを提供しなければなりません。今は、アントラーズの場合も、LCCを利用して成田空港から来るというお客さんが非常に多いのですが、せっかく茨城空港があるのですから、茨城空港に降りて、そこからこちらに入っただけのようにしたいです。今のところ、飛んでいるLCCの便が少ないので、そこにもっと力を入れていけば、茨城空港プラス鹿行地域の観光ということができるのではないかと思います。

○大井川知事

鶏と卵みたいなのところがあるのですが、別に茨城に宿泊しなくたっていいではないですか。ここがすばらしいと思う人は、最初は日帰りですべて来ていても、何日間も滞在したいということになれば、おのずとそういうニーズがわかれば、民間の力でホテルとか何かが進出して来るはずなので、最初からホテルがないから諦めるのではなくて、そもそも連続して来たいくなるようなコンテンツをどうつくっていくかということなのかな。だから、アントラーズというのは一つの大きなブランドだし、コンテンツだと思うので、そうやって世界から集めることができるわけですね。

だから、単純にゴルフ場がありますというだけだとか、100キロマラソンを1年に1回やりますとか、釣りができますというプラスアルファが必要だと思うのです。それは、じゃあおまえ考えろと言われても難しいのですが、でも、そこがないと、そこを考える努力は、今ではなくても、ずっと継続して考えていかなければいけないなと。

次のテーマになってしまうのだけれども、白ハト（なめがたしろはとファーム）さんだっという面白いユニークなコンテンツを提供してくれているから。

○佐藤氏

そうですね。知事のおっしゃられる特別感、サプライズ感というのは、多分、考えて磨き込めば出るものだと思いますので、それをそういう切り口でいろいろ掛け合わせてやったら出てくるのかなと思います。

○大井川知事

そうですね。

奥さん、お子様が、旦那がゴルフをしているときに何をするかというときのメニューを考えながら、例えば、白ハトと釣りというように、うまくメニュー化して、必ず簡単にそれがアクセスできるというようなものかを考えるとか。

○佐藤氏

そうですね。家族で行けるゴルフだったら、それはそれで面白いですね。

○大井川知事

それはそうですね。

○吉田氏

マラソンも、100キロとなると家族は来ないのです。待っているだけだと大変ですから。40キロまでなら我慢できるけれども、100キロは待ち時間が長すぎです。だから、100キロマラソンって意外にお金が落ちないのはそういうところだと思います。来る人数が家族を含め2倍、3倍にならない。いずれにしても家族が待っている間に、何か楽しめるものをつくる必要があります。

○大井川知事

でも、多分、42.195キロでも家族は来ないと思いますよ。

○吉田氏

42キロだと、私の家族は、結構、遠いところ、愛媛とかも一緒に行ったりしています。旅行がてら。温泉に入ったり。

○大輪氏

今の吉田さんのおっしゃるとおりで、ゆえに、今、体験型観光というものに力を入れているというところがあります。最初にこの地域で観光をやるといったときに、行き着くのは、宿泊施設がそんなに強くないとか、コンセプトがあって、サービス力が高いというところがそんなに数がない。それゆえに、最初の知事のご発言であった、なかなか観光と鹿行って今まで県としても結びつかなかったというのは、そういうところが原因なのかなと思っています。

○大井川知事

だから、東京に泊まってもらって来ているという前提でもいい。例えばそういうふうに考えると、あるいは、白ハトさんみたいにグランピング場をつくってしまうとか。

○大輪氏

エッジのきいた体験が必要ということですね。

○大井川知事

それこそ民泊ツアーとか、そのために協力してくれる人をだしてもらおう。家が大きいところはいっぱいあるでしょう。受け入れてくれるところを探す。

○大輪氏

そういうのは面白いですよ。

○大井川知事

でも、誰か言っていましたけれども、すごく立派な古民家がすごく安い値段でこの辺だと手に入るという話があるので、そういうのを逆に集めておいてしまうというか、キープしておいて、民泊に使ってしまうとか、あるかもしれませんね。

○大輪氏

あと体験型でエッジのかかったものが用意できれば、結局、人が増えて、人が増えればそのうちの何パーセントかは泊まるという流れができてくる。

○大井川知事

そう。ニーズが増えてくれば、じゃあホテルでもつくるかという人が出てくると。ないことだけ挙げていてもしょうがないから。

でも、ほかでもやっている、ただ単純に釣り、ただ単純にゴルフだけだと、ちょっと人は呼べないと思います。

○大輪氏

神栖の合宿所なんてまさにそうです。私も家業で父親が合宿施設をやっていますが、サッカーグラウンドの数があって、ここでしかできない合宿ができるから、ただの和室でも年間数万泊まるというところではあるので。

○大井川知事

逆に、和室で、すごく素朴なところで、ものすごく素朴な料理を出されたほうが新鮮だったりするでしょう。

○大輪氏

そうですね。それもまた一つの体験になる。

○大井川知事

囲炉裏でご飯食べるんだとか。畳や障子で、ガラス窓もないようなところというのは逆に

新鮮だったりするかもしれません。という感じで、何か違うことを考えたほうがいいですよ
ね。

○岡本氏

中国のアンダー12の世代のゲストというのは、それがすごくいいみたいです。中国は、い
わゆる一人っ子世代のため親が子離れではないですが、子どもの成長を促すために、団体行
動とか、みんなで泊まるという形式がありません。だから、日本にそうやって来て、
友達と一緒に寝泊まりをするということがすごく新鮮で、楽しいらしい。

課題として、友達と一緒にいられるから楽しくて夜寝ないとかの問題はあるのですが、中
国はそういった視点もあるみたいです。

○大井川知事

なるほどね。

逆に中国で大々的にそうやってサッカーというネタですごく教育に役立つ、人格形成とか、
そのような売り出し方をしてみて、サッカーオンリーだけではなくて、日本型の人間修養と
か協調性とか、一人っ子政策だと多分全くなかったりするような人たちが増えているのでは
ないかという仮定のもとに、そういうニーズがあるかを調べて、広州からそういう発信をし
て。だって、修学旅行に来ている人がいるとおっしゃいましたよね。

○岡本氏

さっき言った中学校はまさにそうで、いわゆる田舎暮らし体験ということで、実はこれは
鹿行地域ではなく茨城町です。このエリアで体験ができなかったのも、茨城町はパッケージ
がある。

○大井川知事

そう、茨城町は民泊をやっていますからね。

○岡本氏

ホームステイが条件であるということで、このエリアでは条件が整わなかったのも。

○大井川知事

いっぱいあるじゃないですか、ホームステイできそうなところ。

○岡本氏

ありそうなのですけれども。

○大井川知事

それが面白いって。メリットがあって、泊めた人にとってもいい体験だということがわか
ると、じゃあ俺もやってみるかという人が増えてくるので、何かで始めてみたらいいですよ

ね。

○岡本氏

少しそこを見てもらって、理解者を増やすというスタイルですよ。

○大井川知事

そうそう。逆に何も無い田舎というのはこんなに新鮮だとはという驚き、中国の都会から来ると逆に新鮮かもしれませんね。

○岡本氏

昨日、DMO事務局員の高木が中国修学旅行の現場に行っているのですが、帰ってきて状況を伺ったところ、父兄が一人修学旅行について来ていて、あとは先生とサッカー部の顧問の方とで大人が4名ぐらい来ているらしい。けれども、ホームステイに子供を預けましたら、では帰りましょうと行って、鹿嶋のホテルに泊まっていると。修学旅行で学校の先生も一緒に来ているなら、学校の先生ぐらいは残りそうだと我々は思ったのですが、全員撤収という形で、子どもさんを預けて、はい、よろしくお願ひしますと。日本の学校だと、誰か先生が一人残って、ちゃんと管理するみたいな感覚だったのですけれども。

○大井川知事

最近そういうのが増えているのですよ。九州で有名な修学旅行先って農家に分宿させるのです。僕も経済同友会か何かで視察に行ったことがあるし、実際、自分の娘がそういうプログラムで学校の修学旅行で泊まったのですが、農家のおじさんの所に2泊ぐらいさせてもらった。受け入れ側は、高校生の女の子が来るといって喜んで、饒舌で元気になるとか、いろいろ副産物があるのです。そういうのが逆に面白がられるのか、毎年申し込みが殺到するというのはあるのですよね。

○吉川氏

インターハイとかも、地方の大会だと民泊をさせることがある。宿泊施設が少ないので。

○大井川知事

そうですね。

○岡本氏

民泊施設が圧倒的に少ないですからね。

○大井川知事

あと、この辺のエリアに廃校がいっぱいありますよね。そこを宿泊施設にするというのは、一つ、手ではないかと。ファーマーズヴィレッジさんも廃校利用ですけれども。

○佐藤氏

今までの話は修学旅行という切り口なのですが、私ども、企業研修も実は多くて、あえて会社の若手だけではなくて、経営幹部の方が何の手助けもなくあえてフリーで農業体験をしています。道具だけお貸しするので、自分たちでカレーライスをつくってくださいねというところ、日頃、仕事の中では生まれにくいコミュニケーションとか連携が出たりしています。

○大井川知事

チームビルディングですよ。やりますよ。

○佐藤氏

うちは廃校をミュージアムにしているのですが、そういう使い方というのはすごく良くて、そういう方がお構いなくという感じになります。どんとお渡して、あとは自分らで考えてというのをカリキュラムすることで、結構そこからの学びもたくさんあって、夜はたき火を囲んで、企業のこれからというのをお話しされたりすると、会議室でやるよりいいというお問い合わせやご予約が非常に増えています。

○大井川知事

そういうコーディネーションとか、進行を助けることをやっている会社ってあるじゃないですか。そういうところと組んで、企業の合宿をうちでやりませんかというキャンペーンを取り込んでいくということもありますよ。そういう企業と組むと、逆に、海外の修学旅行みたいなことにも使えて、チームビルディングのようなそういうメニューを自然の中でやらせようとか、特有の文化を学ぶ、ちょっと差別化できるようにつくるとか。

○大輪氏

確かに、現状、この地域の今までの観光は、他にないものというところまで落ちていないというところ、ここでしか経験できないという競争力の高いところまで落ちていないというところがあって、ゴルフなんかで言うと、ロイヤルゴルフクラブの河田さんと話していたりするのは、アントラーズさんではヘリコプターを飛ばすプランを始めているので、ザ・ロイヤルゴルフクラブさんは、富裕者層とか経営者とか、そういった方向けの高級ゴルフクラブなので、そこで日本国内の移動をヘリでやる高級ゴルフプランを考えてみようとか。

○大井川知事

牛久の近くゴルフ場ヘリで来ていますよ。

○磯山氏

イーグルポイントですね。

○大輪氏

ちょっと高級というところではあるのですが、エッジをきかせて商品とかもとりあえず組

成してみても、いろいろとマッピングしてみるのも一つ考え方としてあるのかなとか。

あとは、この後のテーマともリンクする部分ではあるのですが、農業というところで、茨城は農業が強いしこの地域としてファーマーズヴィレッジさんがあって、体験型観光で農業がいろいろできるというところではあるのですが、他で経験できないという農業の商品があると、それをするためにこの地域に来るといえるのはあると思います。まだ昨年立ち上がったばかりではあるので、組織の立ち上げが大変でというところが言い訳になってしまうのですが、今後さらにこの地域の武器が何なのかというところを磨きこまないといけない。

○大井川知事

徐々にやっていけばいいと思うのですが、ほかにはない産物とか、ほかにはない体験ですよ。多分、サツマイモはいろいろなところをつくっているけれども、あの体験は多分、白ハトさんでしかできない、そういうものですよ。そういうものを考えると。

多分、ロイヤルさんにしてもアントラーズさんにしても、企業として持っているものもあるし、その有効活用というか、ブランディング価値などもきちんとビジョンを持ってやっているの、そこはある程度明確なのだけれども、自治体の人たちは自分たちが持っている棚卸しを、もうちょっとできるのではないかという気がします。民泊の話も含めて、何かもうちょっとあるのではないかという。「こんなもの」と思っているものが、意外と価値があったりするかもしれないという視点で、もう一回、いろいろ探してみるのもありかな。例えば、潮来の観光地も、あやめまつりとかという一般的な観光地と見られているもの以外に何か掘り出しものはないかという目で見ると、もしかしたら出てくる可能性があるのかもしれないなど。

昔、あの辺に花街があったとか、その周辺で見所とかないのですか。

○千野根氏

江戸時代、水郷のまちとして潮来市は栄えていましたので、その際、遊郭が大々的にありました。

○大井川知事

僕も、はじめてこの前行って、聞いて知ったのですけれども、そういうのが今時になると結構珍しくて、そういう歴史も含めて売りにならないのかなとか、いろいろ棚卸ししてみると組み合わせる素材がいっぱい出てきて、いろいろなオプションが増える可能性があるよなと聞いていて思いました。

○大輪氏

岡本さんの専門でもありますが、北浦、霞ヶ浦での釣りなんか、知る人ぞ知る的な広がりから、今や釣り好きの中ではすごく有名な地域になっています。

○大井川知事

そうなのですか。

○大輪氏

はい。

○大井川知事

ブラックバスで？

○岡本氏

そうなのですよ。

○大井川知事

ブラックバスが減っているとか、この間、資料に書いてあったのを読みました。

○岡本氏

減ってもいると思います。なかなか釣りにくいです。ここにいる鹿嶋市の吉川君も大好きなのですが、結構ブラックバサーが多くて。

一方で、行政からすれば、害魚といいますか、外来種というようなところをなかなか公式に打ち出すのは難しいだろうなど。

○大井川知事

でも、釣って、捕ってくれるのだから、良いことなのですよ。

○岡本氏

でも、ブラックバスの業界では、格好いいんですよね、キャッチアンドリリースとか言いました。

○大井川知事

それ、リリースするなど。リリースしてはいけないブラックバス釣りってダメなのですか。

○岡本氏

天然湖でいうと、琵琶湖はキャッチアンドリリースできないですね。釣った魚は決められたところに捨てるというルールになっていまして、リリース禁止となっています。

○大井川知事

できるじゃないですか。

○岡本

そういう条例が実はあるのです、琵琶湖は。

○大井川知事

琵琶湖はね。

○岡本氏

日本の三大レイクじゃないですが、北浦は大きい。霞ヶ浦もそうですが、とにかくメジャーレイクなのです。業界で言うと。

○大井川知事

ええ？そんなにメジャーなの？

○岡本氏

ブラックバス業界ではすごいです。

○大井川知事

ああそう。じゃあ売りにしましょう。

○岡本氏

だと思うのです。

○大井川知事

そのかわり，リリースしちゃだめ。

○岡本氏

今の都知事が環境大臣の時に外来種の対策をされていたと記憶しています。天然湖としての琵琶湖はリリースはしてはならないと、琵琶湖はいち早く、アユがいたり、フナがいたりという、在来種を守るという意味で。

○大井川知事

どう猛なのですね、ブラックバス。釣り人にとっては迫力があっていいのですよね。

○岡本氏

はい、そうです。

アメリカでも日本でも大会でお金が出ているのです。賞金マッチになっているのです。その中でも、霞ヶ浦、北浦というのは、年間、何戦かプロを含めた大会が行われている。

○大井川知事

でも、別にリリースしないでも、釣って捨ててくれるのだったら、逆に、霞ヶ浦とか北浦の美化のために役立つから、大会をやったっていいのではないですか。

○岡本氏

という意見もありますし。

○大井川知事

DMO主催で、県が後援しますから。

○岡本氏

条例などでリリースするなどと言っても、多分、反論する人は余りいないとは思いますが。

○吉田氏

北浦の周り、土日は特に、他県ナンバーの車がいっぱい停まっている。みんな釣りです。

○大井川知事

その人たち、みんなリリースしちゃう。

○岡本氏

地域内水面の問題としては、ナマズがよく釣れるのです。今、ナマズがすごく増えているのです。これを、ブラックバスを釣っている人たちは、釣った魚をカラスの餌にしてしまうのです。そうすると、その辺に放置すると、それが匂って臭いとか、または、釣り人が来ることによって、例えば、ペットボトルやごみ、または釣り具、そういったものが要らなくなって放置されるということで、環境が汚れるということもあるので、では、例えば、河口湖とか山中湖などの富士五湖はどうなっているかということ、漁協が遊漁料を取っているのです。茨城県でも当然そうですが、霞ヶ浦、北浦以外は遊漁券を発行しているじゃないですか。アユとかマスとか。確かにそれはルール決めされていて、ホームページにも出ていると思うのですが、僕ら的に言うと、北浦も霞ヶ浦も遊漁料を取って釣りを楽しんで、そのお金で環境保全をするとか、そういうことが何かできないかなということの一つある。

○大井川知事

漁業組合とのいろいろな軋轢はあるのでしょから、彼らの収入にすればいいのですよね、遊漁料をね。

○岡本氏

それが地域の保全のために利用される。

○吉田氏

お金を取って、来てくれるのかな。

○岡本氏

河口湖はそれでまちが潤いました。

○吉川氏

そうですね。河口湖は、ブラックバスを放流して、釣りを観光資源にしているような。

○大井川知事

放流してしまっているのですか。

○吉川氏

放流しています。

○岡本氏

河口湖は、知事もご存じのとおり、バブル崩壊して、避暑地としてのリゾート的な賑わいがあったところがどんどん衰退しています。

○大井川知事

昔はテニス合宿だ、何とかで流行っていたかと。

○岡本氏

あとは企業の福利厚生施設などで賑わっていましたね。ブラックバス釣りを僕は 20 年以上やっているのですが、河口湖をずっと見ていると、ブラックバスでまちが潤っているのです。大会もする。放流もして、簡単に釣れる。ファミリー層が凄く増えたと感じました。

○大井川知事

こちらは放流はしませんよ。

○岡本氏

こっちはしないですけども。

あそこは小さい人造湖で、富士五湖はそういう形でお金を取っている。

遊漁料は、当日大体 1,500 円ぐらいです。事前には買えば 1,000 円。

○大井川知事

それは、ある意味、河口湖が小さい湖だから、勝手にやっているとすぐに見つけられるということがありますよね。

○岡本氏

そうです。漁協の方がぐるぐるいつも巡回しています。

○大井川知事

北浦とか霞ヶ浦だと、やっても全然わからない。

○岡本氏

そうですね。

あと、富士五湖の遊漁券は、コンビニで売っていたり、漁協でも売っているのですが、いたるところで買えるのです。漁協の方が回って釣り人は直接払うのです。あと、年間でも買えて、1万数千円程度とか。そういうことも何か北浦、霞ヶ浦でできないかなと。

○大井川知事

そうなのですね。いいアイデアではないですか。

○大輪氏

そうですね。今、いろいろ議論をしているのは、霞ヶ浦、北浦ってセットにして考えるという説もありますが、北浦は日本でもかなり広大な、合わせて霞ヶ浦と捉えると日本で2番目に大きいとかいう話もありますし、一つ、そういった自然資源を観光の武器として変えて商品造成をしていけないとか。実際に釣りというところでも、今、バサー、バス釣りの人はすごく来ているという状況があるので、そこら辺をうまく商品造成したり地域にお金を落とす仕組みをつくれなかなという検討を始めているところです。

○大井川知事

いいアイデアですね。

○大輪氏

例えば、釣り以外でも霞ヶ浦りんりんロードを北浦のほうまで伸ばしたりすると、また北浦として、鹿行5市が全て北浦に面するというわけですが、北浦の価値が高まれば、鹿行5市も観光としていろいろとお金を落とす仕組みがつくれるのではないとか。年一のイベントになりますが、ウルトラマラソンもまさにそうですし。

○大井川知事

そうだね。だから、霞ヶ浦で一周して帰られてしまうから、北浦と組み合わせてどこかで泊まるというメニューにするとかというのはあるかもしれませんね。

○大輪氏

北浦は、鰯川のほうも入れると、鹿島神宮とか息栖神社とか、湖の中に鳥居があるというのも特徴です。一つ、フォトスポットみたいに売り出すこともできるでしょうし。

○大井川知事

あれ、ありましたっけ。

○吉川氏

北浦湖畔に、神宮橋の脇に鹿島神宮の鳥居がございまして、インスタスポットとして売り

出しているところなのです。

○大井川知事

人が来ているのですか。

○吉川氏

人は来ていますね。100 キロマラソンのコースにもなっておりまして、大会当日もインスタスポットとして。

○大井川知事

これ、湖の中なのですか。地上に立っているように見えるのですけれども。

○吉川氏

中にあります。

○大輪氏

夕日と一緒に鳥居を撮ったりとか、あとは、電車を撮ったりという写真をネットでインスタとかによく上がったりしているので。

ただ、自治体の観光課として、そこら辺をうまく見せられていないという部分が今の課題としてはあると思うので。

○大井川知事

多分、自治体がそれぞれ考えてやるよりも、みんなまとまって、このDMOで考えたほうが面白いものがつくれそうな気がしますよね。どうしても自治体だと、おらが市でやらなければという制約を受けてしまうので、DMOで考えたら、それを突破していけるのではないですか。そこから提案したほうがいいものができますね。

○大輪氏

地域の旗振り役っばいですね。本当のDMOの意義でもある。

○岡本氏

さっきの釣りの話に戻ってしまうのですが。

○大井川知事

よっぽど好きなのですね。

○岡本氏

好きなのです。行方市の鈴木市長が面白くて、日本で一番発行数が多い『Basser』という雑誌とこういうタイアップをしています。(タイアップ雑誌を見せながら)釣りを市の観光の

武器にしています。

○大井川知事

本当だ。表紙に行方市と書いてある。

○岡本氏

そうなのですよ。

これは関和学というプロバサーで有名な方を使って、行方市内の釣りスポットや地域の観光情報を紹介する。バサーにとっての読み物として非常にいい。

○大井川知事

バスフィッシングする人をバサーというんだ。

○岡本氏

バサーです。

これを行方市が、しっかり資源化していこうと。行方市のシティプロモーションの会議の中でいろいろ議論されたりもしています。

○大井川知事

リリースしないと釣れなくなってしまうのではないの。

○岡本氏

そうとは思いますが。絶対数は減っていきますので。

○大輪氏

我々として、まず北浦で、アクティビティとかもそうだし、観光資源を考えていきたいところもあるし、将来的には霞ヶ浦とセットでいろいろと商品をつくられたり、発信できると面白いのかなと思っている中で、霞ヶ浦は広く我々の鹿行地域を外れる地域も絡む部分なので、そういった大きい文脈の話とかをしていく時に・・・

○大井川知事

間に県が入ったほうがいいかもしれない。

○大輪氏

ありがとうございます。そういった形でやっていければと思っています。

いろいろと議論が盛り上がったので、最初のテーマの流れに戻させていただきます。体験型観光のところは、今、釣りとゴルフとか、その他いろいろ競争力の高い商品をつくっていきましようという方向性で、皆さんからいろいろご発言いただきました。

続いてのテーマの農業で、今の体験型農業でもいろいろな話が出ましたが、DMOの参画

団体になめがたファーマーズヴィレッジさんに入らせていただいているので、佐藤常務から今後、DMOとこういったことができたらいいな、みたいなお考えとかがあったらお話しいただければ。

○佐藤氏

本当に私たちの施設だけでの集客というところから、次の段階は、もう去年ぐらいから動き出しているのですが、単体では限られたものになってしまうのですが、アントラーズさんの観戦とか、ゴルフに行ったりとか、地域の飲食店で受けたりというところをDMO切り口でできるなというところが去年ぐらいから大分動きになってきましたので、あくまでも、うち単体であれば客層が限られてくるところも、そういうコラボレーションとか、うちを経由して地域でご飯を食べていただくというところも、DMOの肩書きを使わせていただくと、地域でまた違う魅力が出てくるというところで取り組んでいますので、そういったところを強化したいなと思っています。

結果的に、そうすると、うち目当てで来るお客さんが、実は、違うところ目当てなのだけれども、うちにも寄ろうかというので、私的には、地域的にはそれでオーケーだと思っています。

あとは、農業の体験も、今までは、来客で県内、県外がほぼ半々というところだったのですが、だんだん都内のお客が増えてきて、都内のお客が来ると、お金の使い方がちょっと高いのです。

○大井川知事

ちょっとではなく、かなり高いのではないですか。

○佐藤氏

確かに、冷静に、1時間半から2時間かけて行ったところで、お金を1,000円を使うためには行かないよなというところがあって、そうすると、春から実験的に、農業体験も今まで2,000円ぐらいでやっていましたが、倍以上の5,800円のコースをつくったのです。そうすると、ピザもつくれるし、収穫体験もできるし、ちょっとクラフト教室もできるし、トラクターツアーもできるしという形でやると、これが爆発的に売れまして、特別感のある路線でいくほうがいいなというところをやると、東京のお客さんって、本当にトウモロコシをもぐ、バリバリバリという音に感動したり、若い女性がそれだけで騒ぐのです。さっきの棚卸しの話ではないですが、農業も、本当に一つ一つを見てみると、発信の仕方で、聞いたことのない音というだけでもお客様はわーっとなったりするので、それをうまく発信していきたいなと思っています。

客数も増やすというところもあるのですが、どっちかといったら、体験の感動を増やすほうが必然的に伸びにつながるのかなという、次の4年目に入ってきた感じでございます。

○大井川知事

さすがですね。感動の作り方が上手い。

○岡本氏

なめがたファーマーズの映像なんか特にそうです。見ているだけで感動してしまって、ちょっとうるっとくるような映像をつくる。

○大井川知事

僕が見たのは、女子社員がいっぱい入社しますというものでした。

○佐藤氏

継続して、毎年、なめがたファーマーズヴィレッジの配属が一番人気で、毎年、5、6人採る。全社で40人ぐらい採るのですが、全国いろいろな場所が対象の中、みんなの配属希望は、引き続きずっとうちのヴィレッジが人気です。

○大井川知事

農業がおしゃれになりますよね、白ハトさんが関わると。

○佐藤氏

そうですね。女性社員が考えて、お揃いの衣装とか、夏は暑いからサロペットのこんなところにロゴを入れようとか、どんどん考えてやっていますので。

○大井川知事

前に、僕、県庁の若手の職員たちと話していたのですが、茨城県って、食材はいっぱいあるのだけれども、それをおいしく食べさせるところが意外と少ないと思いませんか。素材は茨城県は何でもあるんだよって。どこで食べるんだよという、「えっ、えっ、」みたいに言って答えられなかったりしますよね。

○岡本氏

素材はすごくいいのに。

○大井川知事

素材はすごいだけれども、食べさせるところはいまいちということが多くて、それをすごく新鮮な形に変えて、白ハトさんとか、料理と一緒にすごくおしゃれな形で出して、素材をそのまま生かして、ああやって人気が出ているじゃないですか。農業にプラスそういうものがあると、食べるって重要だから。収穫したはいいのだけれども、食べる場所がないというのを何とかしたいのですよね。

○吉田氏

農家のおばちゃんの料理を食べるって。一緒につくるとか。

○大井川知事

逆にね。家庭料理，こっちは家庭料理が食べられる。

○吉田氏

うちでは，自分で収穫した料理をこうやって食べているのだという素朴な味を。

○岡本氏

ストイックな農泊みたいな，その家庭に入り込むぐらいの。

○大輪氏

アグリツーリズムがうまくいっているところは，そういうおしゃれな農家レストランみたいな感じのものだったりしていて，雰囲気もしっかりおしゃれな内装をつくっていて，古民家を改修して。この地域はそこまでなかなか至れていないのかなというところと。でも，内田さん，銚田市とかは，そういう農家レストラン的なものがあったりするのですか。

○内田氏

銚田市が日本で一番野菜をつくっているにもかかわらず，発信力，企画力がどうしても弱いという現状があります。

実は，サツマイモも，行方市さんではなく，うちが一番生産している。でも行方市さんのほうが有名ですし，そのPRが下手ということは感じています。

○大井川知事

PRの問題ではないんじゃないの。

○大輪氏

例えば，若い人がちょっとデートに行く，野菜をおいしく食べられるみたいな店だったりがあれば・・・。

○大井川知事

別に若い人のデートに限定せず，子供や家族を連れて行きたい特徴的な店とかあると良いよね。なめがたファーマーズヴィレッジさんとデートにも行きたいと思う。他には，東京の人が「えっ！」と驚くような素朴な体験ができてしまうとかが，何か特徴のある食べるところってないですよね。別に銚田がと言っているわけではないのですが。

○内田氏

そこが銚田市に限らずこの地域は弱いなというところがあります。

○大井川知事

そこは県としても応援したいですね。水戸でも特徴のあるお店がない。本当にはないですよ。

これは！というところがなく、外から来たマスコミのみなさんも驚く。県庁の周りに何も無いじゃないかと。よくこれでもっているなみたいな、そんな話をされているという噂を聞いた。

○佐藤氏

オール茨城産の野菜を使ったレストランとかやれば、結構はやるのではないですかね。本当の素材の良さが体感できますし。

○大井川知事

ちゃんとおいしく料理してくれる人がそれをやってくれるといい。

○佐藤氏

そうですね。それ面白いな。

○岡本氏

農業テーマパークのなめがたファーマーズヴィレッジさんが、次にほこたヴィレッジをつくるとか、いばらきヴィレッジをつくるとか。

○大井川知事

そう。逆に、こういうできる人に進出してもらったほうが早い。自分たちでやろうとしないほうがいい。

○内田氏

それは思っています、例えば、DMOになめがたファーマーズヴィレッジさんの方が出向して、鹿行全域に展開したり。

○大井川知事

場所と建物を用意するから、お金を出すからやってくれと行ってさ。

○内田氏

その観光をパッケージ化していただけると非常にいい。それを今思っています。

○大井川知事

そういうのを行政が自分でやるとだいたい失敗するから。

○内田氏

なので、できれば、鉾田市に限らず、ほかの鹿行地域、DMOということで連携しているので、ここにやっていただけると非常にありがたい。

○岡本氏

廃校もあるし。

○大井川知事

例えば、白ハトさんでも、リスクはほぼゼロに近い形で、収入もきちんとある程度補助するという形で、こういう場所を準備しますから、ぜひ進出してくださいとなれば、考えるかもしれない。

○佐藤氏

全然考えます。

○内田氏

土地とおいしいものはあるので。

○大井川知事

今、なめがたファーマーズヴィレッジさんは本当に土地が足りないですね。

○佐藤氏

足りません。

芋畑が足りないというぐらいのことですから、なめがたファーマーズヴィレッジとしては、隣のところで。

○大井川知事

県の施策としても始めます。芋畑拡大策。

○佐藤氏

おかげさまで、北茨城も、今年、一部やらせていただいたりとか。そういうふうには土地を活用させていただければ、そこで作物をつくれれば、芋はどれだけあっても足りないぐらいなので。

○大井川知事

そうですね。海外でも売れまくっている。

○佐藤氏

そうです。すごいです。なので、そういう連携があれば、うちの持っているノウハウとかブランディングというところを切り口でやらせていただければ。

○大井川知事

ああ、それもいいんじゃない。海外のドンキホーテで売れてすごいよ、焼き芋が。そこを

うまく観光に引っ張り込むキャンペーンに使えるといいね。焼き芋のふるさとに来てくださ
いとかがいて。

○佐藤氏

そうですね。今、着実につながっています。ドンキさん、今攻めているところなので。場
所によっては40トンの焼き芋が、シンガポールのドン・キホーテで売れている。今のアイデ
アは全然いけると思う。ぜひ場所があれば提供してください。それは畑でも食べ物でもいろ
いろなブランディングができると思います。

○大井川知事

こういう能力がキレキレの人たちをお願いしたほうがいいですよ。

○岡本氏

お願いします。

○佐藤氏

よろしくお願いします。

○岡本氏

実際、なめがたファーマーズヴィレッジさんは土地が足りない、畑が足りないんです。

○大井川知事

聞いています。悔しいよね。今、大号令かけているからね。

茨城を圧倒的なあれにするという、今、大号令かけている。もうすぐ具体化できます。

○大輪氏

議論が盛り上がっている中すみませんが、意見交換会も残すところあと5分になります。
最後のテーマ、海外に向けてのプロモーションについては、大きく議論をするというよりは、
我々アントラーズホームタウンDMOとしての取り組みの共有、先ほど中国支社という話
がありましたが、そういうという話を共有しつつ、DMOとして今まで県のプロモーション活
動と十分に連携ができていなかったという課題もあり、県の方でもユーザーを誘致し
たり、海外でもファムトリップとかをやられているという話は聞いているので、今後そう
いったところで連携したり、こちら競争力の高い差別化できる商品を用意できた際に取
り扱ってもらうという流れを作ればなどと考えていて、そういった頭出しができればと思
います。

○大井川知事

ネットでいろいろ発信とかして、茨ひよりちゃんというVチューバーに、中国語と英語と、
いろいろしゃべらせているなんていうこともやっていますが、台湾の市場向けとか、英語圏

とか、そういうところに発信するときに、このDMOがやっている活動、例えば、サッカーの合宿とか、ファーマーズヴィレッジの話とか、バス釣りがどうなるかわかりませんが、そういうものも含めて、発信の材料にさせていただくのは、ぜひぜひこちらからもお願いしたいです。

○岡本氏

そうですね。僕らもテレビのほうというか、我々のコンテンツをぜひ県のほうに提供しながら、そこは協力しながらぜひできれば。

○大井川知事

アントラーズの合宿の吸引力をもっともっと増やせませんか。合宿のメッカみたいな、アジアのフットボール少年の聖地みたいな感じにして。

○岡本氏

知事にもオリンピック案件でもお話がいつていることと思いますが、スタジアムを一つのハブにして、あの周辺が例えばサッカー場だらけになって、クラブハウス機能もできればより賑わう。

○大井川知事

実際つくっていますよ、サッカー場。

○岡本氏

そうですね。ちゃんと理解しております。

○大井川知事

大変ですよ。

○岡本氏

どんどんスタジアム周辺を中心として広がっていけば良いですね。そういうことですね。

○大井川知事

そうですね。

○吉田氏

まだ足りないもんね。

○岡本氏

足りないですね。

○大井川知事

ええ、まだ足りないかな。

○吉田氏

今、100面ぐらいあるのですが、まだまだですね。

○岡本氏

欲を言えばまだまだたくさん欲しいですね。

○大輪氏

アントラーズが、昨年、アジア王者になったという流れもありますし、いろいろやるなら今かなというところがあるので、今は地道に中国支社のほうと連携しながら、今度、動画をつくったりとか、中国で流してもらったりというところも検討したりしています。しっかり実績を積み重ねながら、いろいろと普及させていくということをしていかなければいけないかなと。

ウルトラマラソンも、今回海外に向けて特にプロモーションしていないけれども、台湾から参加者がいらっしやいました。

○磯山氏

そうですね、3名ほど台湾から来たので。

○大井川知事

どこで情報を掴んでいるのでしょうかね。

○岡本氏

どうですかね。やっぱり『ランナーズ』ですかね。

○吉田氏

『ランナーズ』という雑誌が運営している『RUNNET』というWEBサイトですね。

○大井川知事

ランナーにとっては、距離が長いことが大事なのですか。

○吉田氏

いやいや、そんなことはありません。

○大井川知事

何が大事なのですか。

○吉田氏

大会を選ぶときですか。基本的には、フルマラソンに出る人が多いですが、アスリート系の人は、記録の出やすいところ、フラットで走りやすいところの人気の高いです。

○大井川知事

それは、ここら辺がいいではないですか。

○吉田氏

そうです。ここはフラットですね。

あとは、終わった後の余韻を楽しめる賑やかさがゴール地点にあるとか、あとは、エイドステーション、5キロ置きぐらいに給水所がありますが、その食事プラスおもてなしも決め手になります。

○大井川知事

食事もとるのでですか。

○吉田氏

食事とります。

○大井川知事

走っている間に。

○吉田氏

走っている間に。100キロだと12時間ぐらい走りますから。フルマラソンでも、途中で、バナナとか飲料を取ります。そこでの対応というか、疲れたときにエイドステーションの方々との触れ合いが心に残ったりして、もう一回来ようかなとなる場合があります。

○大井川知事

触れ合いね。

栃木で赤字になった100キロマラソンとこっちの100キロマラソンって何が違うのですか。

○吉田氏

日光の100キロマラソンは2回で消滅しました。

○大井川知事

それは何で？さっき赤字が多かったというけれども、何で赤字になっちゃいましたか。

○岡本氏

支出が大き過ぎただけの話だと思います。

○大井川知事

どういう業者が間に入っていたのですか？

○大輪氏

日光のDMOには大手の広告会社や旅行会社が入っていますので、そこら辺の企業に流れていたのかもしれない。大手の広告代理店は何かと高いので。

○吉田氏

最初から汲々でやっているという感じだから、エイドステーションとかのサービスもこちらの北浦のほうがずっと上です。日光は、私、一回走りましたけれども、やっぱりよくなかったですね。

○大輪氏

議論も尽きませんが、ここで一応意見交換会は閉めさせていただきます。

きょう、いろいろとご意見をいただいた部分を、我々、今後やっていくときにいろいろ参考にしながら、県とも連携しながらやっていければと思います。引き続きよろしく願います。

○大井川知事

たいへん楽しいディスカッションをさせていただいて、いろいろヒントをいただきました。皆さん、今後ともぜひよろしく願います。